Nagoya City University

興福寺別当僧正良円

―延慶本『平家物語』三本・廿二〈興福寺常楽会被行事〉をめぐって―

服部幸造

前稿「南都炎上後の興福寺常楽会―延慶本『平家物語』三本・廿二〈興福寺常楽会被行事〉をめぐって―」（注1）において、延慶本・長門本の記事を検討した。

今一度延慶本の問題の記事を示す。

a　三月一日、東大寺・興福寺ノ僧綱等、本位ニ復シ、寺領等如元知行スベキヨシ、宣下セラル。

b　此上ハ大会共被行ベシト僉儀ニテ、恒例ノ三会被行。

c　十四日舎利会、十五日涅槃会、如常。仏力尽ヌルカトミヘツルニ、法燈ノ光キヘズシテ被行コソ目出ケレ。十六日常楽会也。此会ト申ハ、南閻浮提第一会ナリト云フ。

d　サレバ、日本国ノ人ノ炎魔ノ庁ニ参リタムナルニハ、興福寺ノ常楽会ハ拝ミタリシカト、先一番ニ炎魔大王ノ問給ト申伝タリ。

e　サレバ、鳥羽院ノ鳥羽殿ヲ御造立有テ、此会ヲ移テ行ハセ給ケルニ、恐ハ本寺ニハ劣タリト云沙汰有テ、其後ハ又モ被行ザリケリ。

f　此寺ノ下ハ龍宮城ノ上ニアタリタル故ニ、楽ノ拍子モ舞ノ曲節モ殊ニ澄トカヤ。

g　サレバ、尾張国ヨリ熱田大明神ノ見物ニ渡セ給ナレバ、川南補ト云舞ヲマフ。中門ノ前デ、三尺ノ鯉ヲ切テ酒ヲ飲ヤウヲ舞トカヤ。河南補ノ包丁、古徳楽ノ酒盛トゾ是ヲ云ナルベシ。

h　別当僧正良円ノ沙汰トシテ、楽人ノ禄物、常ヨリモ花ヲ折リ月ヲミテ、度カサネラレケレバ、目出見物ニテゾ有ケル。

前稿では、

①治承五1181年三月の記事の中にある「常楽会再興」は、いつのことであるのか曖昧である。史実ではこの年二月の常楽会は禅定院で行われた。

②十四日舎利会、十五日涅槃会、十六日常楽会、というのは誤りで、涅槃会と常楽会は同じものであり、興福寺常楽会の翌日は法華会と呼ばれていた。

③菅家本『諸寺縁起集』によれば、十四日の舎利会（報恩会とも言う）が始められたのは、承元二1208年のことであったと言う。これが正しければ、延慶本などの記事には二十八年後のことが紛れ込んでいる。

ということを確認した。本稿では残された、別当僧正良円について述べる。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

hについて

延慶本・長門本は最後に「別当僧正良円」の沙汰による楽人への禄物がすばらしいものであったことを記している。興福寺の別当僧正良円とは九条兼実の息である。興福寺再建に大きな役割を果たした信円の弟子で、二度別当になっている。初度は承元元1207年正月二十二日であり、翌承元二年二月六日に辞している。二度目は建保六1218年十二月二十六日であり、承久二1220年正月十四日、別当のまま亡くなった。四十二歳であった。すなわち良円が興福寺別当であった時の常楽会は、承元元1207年と承久元1219年の二度のみなのである。先に見た菅家本『諸寺縁起集』にある舎利会の始まりとされる承元二年の常楽会にはその直前に辞しているから、これを信ずれば舎利会・常楽会・法華会の三つを良円が別当として行うことができたのは承久元年のみとなる。ただし治承五1181年の別当は信円であったから、信円を良円と誤ったのであれば問題は別である。

良円のこと

最後に良円という人物について触れておく。良円という名の僧侶は、延慶本と長門本にはこれ以前、第一本・二〈得長寿院供養事　付導師山門中堂ノ薬師之事〉にでてくる。鳥羽院の御願寺である得長寿院供養の導師に天台座主が定められたが、座主がこれを辞退したために、寺々の高僧たち十三人が導師を望み申した。その十三人の中に「園城寺権大僧都良円」の名がある。これら十三人の僧名はいずれも特定できない。渥美かをる・冨倉徳次郎氏がその特定を試みられたが、いずれも確実なものとは言えない（注2）。渥美氏はこの「園城寺権大僧都良円」を「興福寺の別当になった良円」と考えられ、「十三人の僧名は、供養当時の人ではなく、それよりおよそ一世紀後の、十三世紀前半の、主として藤原家の関係者であることが推察される。」とされた。いずれにせよこの問題はいまだ解決されてはいない。

この時代の興福寺院家（一乗院と大乗院）の相承をめぐる摂関家内（近衛家と九条家）の人脈と争いについては、大山喬平・安田次郎氏によるすぐれた研究があり（注3）、以下もそれらを参照しながら述べるものである。

良円は九条兼実の息であり、同母兄弟には慈円の弟子であり天台座主にもなった良快がいる。異腹の兄弟に良尋がおり、これも慈円の弟子となったが、慈円と対立し比叡山を下りた（注4）。兼実は同腹の二人を出家させ、一人を延暦寺に一人を興福寺に送り込むことを考えていた。『玉葉』文治三1187年十月二十七日の記事に、小童（良円）が僧正（信円）と共に南都に下向したことが記されている。この年良円が九歳であったことは同年一月十七日の記事にある。また同年十一月二十七日の記事には十一歳の小童（良尋）が慈円の下で出家したことが記されている。兼実の政治的野望は見事な布石を打っていったように見える。彼は延暦寺では同母弟の慈円を、興福寺では異腹弟の信円を信頼していた。信円はその血筋からいえば近衛家に近いが、早くか

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ら兼実と信円の親密な関係が見られ、信円は後々まで興福寺における近衛家の勢力を封じ、九条家のためにはたらいている。

『玉葉』の文治五1189年十月八日の記事に、僧正（信円）が兼実の所に来、「小童」を具して南都に下る予定であると語ったとあるが、建久元1190年十月以降良円は「奈良禅師」と記され、「大乗院日記目録　巻一」（注5）の文治五年の項に「良円出家、十一、信円僧正弟子」とあるから、良円の出家の年は文治五年の暮と見てよいであろう。良円十一歳であった。良円は幼くしてすぐれた能力を発揮したようで、建久元年十一月二十四日、上京した奈良禅師の竪義を聴聞した兼実は、「所作の優美、実に耳を驚かす。問答成敗、幼年のなす所にあらず。偏に大明神の加護なり。歎美すべしと云々」と記している。親馬鹿とばかりは言えないものがあったのであろう。建久二1191年閏十二月十九日の記事にも、別当覚憲と面談した兼実は、「禅師所作未曾有之由、感歎無極」と記している。

建久七1196年、維摩会講師を勤めた。権少僧都、十八歳（注6）。この時のものと思われる「良円草維摩会講師自謙句」が東大寺図書館蔵『大会以下表白、自謙、秀句等』に収められている（注7）。建永元1206年、維摩会探題、法印権大僧都、二十八歳。この時の探題予定者が辞退したため、雅縁の推挙によって「良円法印」に命ぜられたことは、『猪隅関白記』同年五月十八日条にある。

承元元1207年、正月二十二日（「二十五日」とするものもある）、興福寺別当。権僧正、二十九歳。維摩会探題、この時の講師は近衛家出身の権少僧都実信であった。『三会定一記』は「抑今年維摩会勝事非一。講師者、近衛禅定殿下御息、当時関白御弟也。専寺探題者、故九条入道殿下御息也」と記す。この実信は良円の弟子ということになっていた（注8）ので、良円の死後、雅縁から良円が譲り受けた（あるいは雅縁の死後譲り受けることになっていた）遺跡を、実信は自分が相承すると主張した。雅縁から相談をうけた信円は、実信は雅縁の門室に入った者ではないとの理由でこれに反対し、道家の若君（円実であろう）に譲るよう計らった（注9）。

承元二年二月六日、別当辞退。『興福寺別当次第』には、「或者、御寺連々不閑之上、御所労之故也」と記す。『猪隅関白記』の同年二月七日条にも「権僧正良円」が所労によって別当を辞すとある。

建保六1218年十二月二十六日、二度目の別当。四十歳。承久元1219年四月、僧正。『興福寺寺務次第』『興福寺略年代記』『興福寺三綱次第』によれば、承久二年正月十四日、一条院において入滅。四十二歳であった。ただし「大乗院日記目録　巻一」には「五月十四日、僧正良円入滅　四十二、菩提山常光院御墓」とある。

この他『明月記』元久元1204年五月十五日の記事に、最勝講に出席した「入道殿下御子息両人」の所作が「殊勝」であり、聞く者はこれを「称讃」したとある。良円法印（二十六歳）と良快僧都の二人である。

良円は僧侶としての資質にめぐまれ、よく研鑽し、父の兼実や、叔父であり師である信円が期待をかけ、兼実の政敵源通親の弟雅縁から

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

譲りを受けるほどの人であったが、精神的にも肉体的にも弱かったようで、別当の期間は二度とも短い。良円が別当として常楽会を行ったのは、承元元年と承久元年の二度のみであった。九条家の兄良経が、良円初度別当の前年の建永元1206年に亡くなり、父兼実が承元元年四月に亡くなっている。このように九条家が昔日の勢力を失ったなかで、常楽会において多くの禄物を出すことができたとすれば、晩年の父兼実か、円実の父道家の力によるものであったろう。

（注）

1　福田晃編『伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』（二〇〇三年一月刊行予定　三弥井書店）

2　渥美かをる「説話形成についての一考察―平家物語長門本の得長寿院供養譚をめぐって―」（「文芸研究」42　一九六二年九月）、冨倉徳次郎『平家物語全注釈　下巻（二）』（一九六八年八月　角川書店）

3　安田次郎「中世興福寺と信円」（『中世興福寺と大和』二〇〇一年六月　山川出版社）、大山喬平「近衛家と南都一乗院」（岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究　下』一九八三年　塙書房）

4　多賀宗隼「慈円と良尋」（『論集中世文化史　下』一九八三年九月　法蔵館）

5　増補続史料大成『大乗院寺社雑事記十二　補遺・日記目録』

6　『三会定一記』（大日本仏教全書123）には「十九」とある。以下同書は年齢が一つずつずれている。

7　永村真『中世寺院史料論』（二〇〇〇年十二月　吉川弘文館）269頁

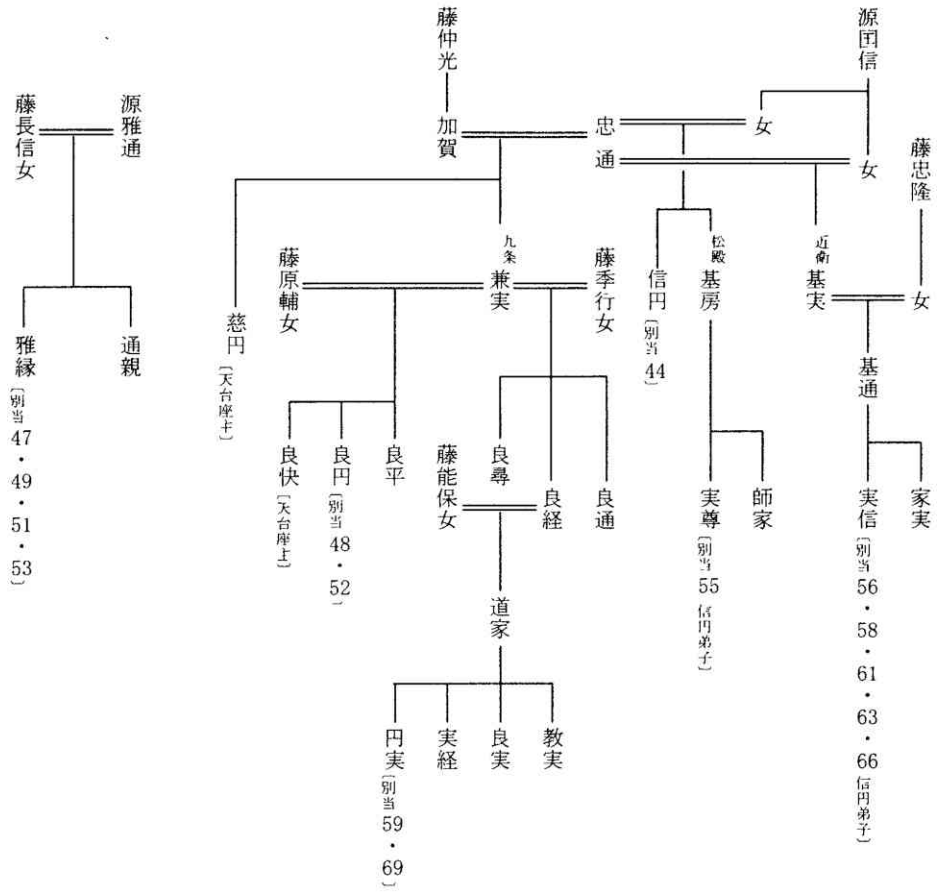
8　『春日社記録』「中臣祐明記」承元三年〔己巳〕日記に、「〔普賢寺殿歟〕近衛入道殿下御子息、小々将殿御腹若君御前、正月日一乗院僧正御坊御弟子ニ令被成天、二月五日〔己巳〕、春日社巳時御参詣」とある。（増補続史料大成『春日社記録　一』107頁）

9　『鎌倉遺文』四―二六四〇「興福寺別当雅縁譲状案」

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

良円関係系図（興福寺別当には「別当」と記し、『諸寺別当并〔維摩会天台三会〕講師等次第』の「興福寺別当次第」の番号を付した。）



NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

良円関係年譜（＊は「大乗院日記目録にあるもの。」

西暦	和暦	年齢	良　　円	関　連	摂　関	別　当
1177	治承元				基房	
1178	二					
1179	三	1	生＊		11基通	4・25玄縁
1180	四	2		12・28南都炎上、実尊生＊		12・25没
1181	養和元	3				1・29信円
1186	文治二	8			3兼実	
1189	五	11	出家＊　12方広会竪義＊			5・28覚憲
1190	建久元	12	法華会竪義＊　慈恩会竪問第三問＊			
1191	二	13	慈恩会竪義＊			
1192	三	14	第二夜研学＊	3後白河法皇没		
1193	四	15	最勝講問者＊　10権少僧都＊			
1194	五	16	9興福寺供養引頭＊			
1195	六	17				12・26範玄
1196	七	18	10維摩会講師＊（三会定一記他）	11兼実失脚	11基通	
1198	九	20		実信生＊		12・20雅縁
1199	正治元	21		1頼朝没		
1200	二	22	1大僧都（玉葉）　5最勝講講師＊			
1201	建仁元	23	5法印＊			
1202	二	24		1兼実出家	12良経	
1204	元久元	26	5最勝講（明月記）			
1206	建永元	28	維摩会探題＊〈法印権大僧都〉（猪隅関白記・三会定一記）	3良経没	3家実	
1207	承元元	29		4兼実没		1・22良円
1208	二	30	2・6辞別当	2・14舎利会始まる		2・11雅縁
1209	三	31	実信出家、良円弟子＊			
1213	建保元	35				12・25信憲
1214	二	36		円実生＊		
1217	五	39	西金堂一番頭＊			12・12雅縁
1218	六	40	12別当			12・26良円
1219	承久元	41	4僧正（別当次第）　5最勝講証義＊　11維摩会探題（三会定一記）	3頼経将軍		
1220	二	42	1・14没（＊は5月）　西金堂一番頭＊			1・26雅縁
1221	三		菩提山常光院において良円仏事＊	5承久乱	4道家、7家実	

NII-Electronic Library Service